

令和6年度山口県立大学 国際文化学部国際文化学科 学校推薦型選抜（県内高校卒） 「小論文」問題用紙

次の文章を読み、以下の問（問1、問2）に答えなさい。

アメリカの友人と食事をしている時のことである。「この料理好きか？」と聞かれて、思わず「まあまあ好きだね」と答えていた自分がいた。本当は好きではないのである。親しい友人なので、特に嘘を言う必要もないし、その料理をおごってもらっているということでもない。なぜ僕はとっさに嘘をついてしまったのか。料理の好き嫌い、というのは「本音と建前」といったことでもないの、自分の思っていることとは逆のことを言う必要もないはずなのだ。

あとでよくよく考えてみると、英語で聞かれた時と、日本語で聞かれた時には、自分の答えが全く逆のことがある、と思いがたった。英語で話す時には、人格が変わっているのだ。とても恐ろしい。気づかないうちにもう一人の自分が育っていた。

もちろん、話し相手によって自分の答えの表現を変えるのは、当たり前である。でもそれが、話し相手というよりは、英語で話すという環境で変わってしまっている、ということに自分で気づき始めた。

理由はおおよそ見当がつく。20代後半、カリフォルニアで暮らし始めた頃のことだ。それまで日本で当たり前のように使っていた日本語、それを英語に翻訳しただけでは、人間関係がうまくいかなかった。

例えば、「おはよう」と言われた時にも、「元気かい？」「ああ僕はとても元気だよ、君はどうだい？」「ああ、元気だよ」と続けなければいけないのだ。ここで真面目に、「いや、ちょっと元気とは言えない感じの気分なんだけど、まあまあ元気とも言えるかな」とか答えると、不思議な顔をされて、心配される。だからとりあえず「元気だ」という言葉の定義を広くしておいて、たいていは自分が元気であるという状態にあると認識しておく方が楽なのだ。

物理学者は、研究の議論を毎日続けて、その研究の成果を論文として発表するのが仕事である。共同研究者とは議論をするのが日課だ。その議論の仕方が、カリフォルニアでは全く違っていた。しゃべりまくるのだ。物理学の新しいアイデアを誰かが話し始めると、「そうだそうだ」「いやそうではない、なぜなら」といった会話が怒濤のように続き、全く止まらない。当初は相当戸惑った。研究の議論ができなくては研究ができない。

理論物理学の研究は数式で書かれるのだが、日本では、その数式を共同研究者と眺めて静かに考えているだけで、「議論」が成立していた。ところが、カリフォルニアでは、数式の前で自分がしゃべってアイデアを主張していないと、議論しているとは言えないのである。

ランチテーブルを研究者たちと囲んでいる時も、雪崩のように物理の議論がとめどなく押し寄せてくるスタイルについていけず、ランチのたびに落ち込んでいた。自分が研究に貢献できていない気がして辛かった。

毎日一緒にテーブルを囲んでいた一人に、インド人の友人がいた。彼はいつもニコニコしながら、他の人が話すのを聞くだけで、全く議論に参加しなかった。そこで彼に尋ねてみた。どうして議論に参加しないのか、と。すると彼はこう答えた。「国によって議論のスタイルは違うものさ。あの人たちのスタイルは僕には合わない。だって、あんなに速く話したら、自分が話していることが科学的に正しいかどうか自分でもわからないじゃないか。そんな議論はキライだ」

その時ようやく僕は気づいた。そう、文化の違いは物理の議論のスタイルにも大きく影響するのだ、と。そして、いつの間にか自分もそれに流されて、新しい文化に慣れようと喘いでいたのだ。

気づいた後、考えた。このまま自分の日本スタイルを保って頑固を通すか、それとも、郷に入っては郷に従えの格言通り、カリフォルニア風の議論をマスターするのか。僕は後者を選んだ。

未だマスターしたとは言えないが、少なくとも、英語で議論をする時には、日本語の自分とは違う人格が登場して、そのモードに切り替わることは毎度感じる。そしてむしろ、英語の自分が日本語の自分に影響を与えていることもよく感じる。

人と挨拶をする時も、ちょっと親しげに挨拶したい時には握手を求めたりしてしまうのは、英語モードの自分が出ているんだろう。

言葉が違うということは、言葉で作られる自分自身の考えも変わるということだ。

(出典：橋本幸士「別人格の自分に出会う」、『^{ぶつり}物理学^{しゆ}者のすごい^{しゆ}思考法^{しゆ}』、株式会社集英社インターナショナル、2021年3月31日、第三刷、151～154頁より。出題の都合で、問題文の一部を改変した。)

問1 下線部「英語モードの自分」とは、どのような状態なのか、**200**字以内で説明しなさい。

問2 出題文に基づき、あなたが母語以外の言語を学ぶ上で重要だと考えることを、**400**字以内で具体的に述べなさい。

令和6年度山口県立大学 国際文化学部国際文化学科
学校推薦型選抜（県内高校枠）「小論文」出題意図

● 出題意図

筆者は、自らの体験に基づき、母語以外の言語を使用することによって、その人格に変化が起こることを述べている。

本問のねらいは、第一に、受験者にとって、本学において母語以外の言語を学習することが、自らの行動様式を変容させる可能性があることに気付いているかを問い、第二に、他言語学習においては、異文化理解が必要であり、そのことを説明させることで、受験者が国際文化学科で学ぶために必要となる基礎的な知識・技能を有しているか、そして論理的に思考・判断し、さらに表現する力を有しているかどうかを評価することである。